

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：11201

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884003

研究課題名(和文) 宮廷芸術の二重性 18世紀ザクセン＝ポーランド同君連合における美術政策の研究

研究課題名(英文) The Duality of the Court Arts: Art Policy in the Polish-Saxon Personal Union in the 18th Century

研究代表者

金沢 文緒 (Kanazawa, Fumio)

岩手大学・教育学部・准教授

研究者番号：80606997

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000 円

研究成果の概要(和文)：本研究は、18世紀のザクセン＝ポーランド同君連合期における両国の宮廷芸術について、その二重性という新たな視点からアプローチし、同君連合期の政治方針との関連性を明らかにすることを目的とした。18世紀の二代のザクセン選帝侯の統治期を対象として考察を行い、大衆向けのメディア、ルイ14世やヤン・ソビエスキ3世などの先行君主の美術政策からの影響関係などの分析調査の結果、君主に雇用された宮廷芸術家は、それぞれの国に対する政治方針の違いに応じて、作品制作の差別化を行っていたことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Saxony and Poland accepted the same sovereigns in the course of the 18th century: Friedrich August I and Friedrich August II. Therefore the court artists, who worked in Dresden, received commissions not only for Saxony, but also for Poland. This study attempted to elucidate the art policies during the period of the Polish-Saxon Personal Union (1697-1763), focusing on the duality of the court arts. The present study investigated political representations in the visual media and the influence from the predecessors such as Louis XIV of France and John III Sobieski of Poland. The examination of art works and the related documents revealed how the sovereigns customized their respective art policies for the two countries, and how their court arts functioned as political propaganda reflected such differentiation.

研究分野：美術史

キーワード：フリードリヒ・アウグスト1世 フリードリヒ・アウグスト2世 宮廷画家 ベルナルド・ベロット 寓意 ルイ・ド・シルヴェストル プリュール伯 西洋美術史

1. 研究開始当初の背景

本研究実施者は近年、ザクセン選帝候フリードリヒ・アウグスト2世(在位1733-1763年)の統治下のドレスデンにおいて、イタリア絵画がどのように受容されたのかという問題を中心に研究を行ってきた(平成23年度日本学術振興会特別研究員(PD)「18世紀半ばのドレスデンにおけるイタリア絵画の受容について」)。この研究では、ドレスデンの宮廷芸術に焦点を絞って考察を行い、一定の成果を得た。本研究は、その考察を通じて新たに得た研究課題である。

18世紀、ドレスデンはザクセン選帝国の首都として、選帝候フリードリヒ・アウグスト1世(在位1694-1733年)と息子フリードリヒ・アウグスト2世(在位1733-1763年)のもとで繁栄し、これに伴って宮廷芸術も花開いた。これら2代の君主は同時にポーランド国王も兼任し、ドレスデンとワルシャワを行き来することでザクセンとポーランドの二重統治を行っており、ザクセン選帝国とポーランド王国はこの時期、政治的には同君連合の関係にあった。すなわち両君主は、ザクセン選帝候とポーランド国王という2つの側面を備えていたのであり、従って、ザクセン選帝国のみならず、ポーランド王国の統治においても、宮廷芸術は必要とされたのである。ザクセン＝ポーランド連合期の宮廷芸術に関する近年の研究成果として、1997年に大規模な展覧会がドレスデンとワルシャワで共同開催されたが、両都市で別々に出版された展覧会カタログは、それぞれの所蔵作品と歴史文化に対象を絞った個別研究の成果発表に留まり、ザクセン(ドイツ)とポーランドの間には、一種の研究断絶があったことは否めない(Werner Schmidt (ed.), *Unter einer Krone. Kunst und Kultur der saechsisch-polnischen Union*, Dresden, 1997 / *Pod jedną koroną. Kultura i sztuka*

w czasach unii polsko-saskiej, Warszawa, 1997)。

本研究実施者が参画した展覧会「ポーランドの至宝 レンブラントと珠玉の王室コレクション」展(アンジェイ・ロツテルムンド他著、金沢文緒他訳、同展覧会カタログ、東京富士美術館他、2010年)でも実感されたことだが、ポーランドでは、二重統治期の宮廷美術は伝統的にポーランド美術史の範疇に含めない傾向があり、同国での研究の停滞が指摘できる。近年、歴史学では同様の問題意識からアプローチが開始されつつあるものの(Jacek Staszewski, *August II Mocny*, Wrocław, 1998) 美術史の分野はまだその認識には至っていないと言える。

君主たちのポーランド滞在は限定的であり、ポーランド本国に雇用されていた宮廷芸術家はごく少数であった。そうしたポーランドの宮廷芸術の不足を補うべく、イタリアなどヨーロッパ各地から招聘され、ドレスデンに活動拠点を置き、通常はザクセンに関わる作品制作を行っていた「ザクセン選帝候の宮廷芸術家」が、時にポーランド向けの作品制作にも携わることとなった。しかしながら、ザクセン側の研究においては、この宮廷芸術の二重性の問題は看過されてきている。

さらに、このようなポーランド向けの作品においては、構想された実際の芸術環境はザクセンであり、一方、構想段階で配慮されるべき文化的背景はポーランドにある、という二重性が生じていたと考えられ、これには両国の異なる歴史背景を視野に入れながら総合的に考察していくことが求められるが、先行研究では、そうした作品制作における二重性に対する問題意識は見落とされてきたと言える。

2. 研究の目的

本研究はザクセン選帝候がポーランド国

王を兼任した事実に着目し、両国の宮廷芸術が時に重なっていた事実からアプローチを試みる点において、ザクセンの歴史的事情のみを視野に入れて考察を行ってきたドレスデンの宮廷芸術についての先行研究とは一線を画すものである。また、作品の構想された実際の芸術環境はザクセンであり、一方、作品の構想において配慮されるべき文化的背景はポーランドにある、という作品制作における二重性に対する問題意識も、本研究の特色である。こうした視点からのアプローチにより、これまでドイツとポーランドでそれぞれの国の歴史的事情に対象を絞って考察されてきた個別研究の成果を統合し、それぞれの国に所蔵される作品や一次資料を俯瞰的な立場から新たに分析調査することにより、この時期の宮廷芸術の全体像を浮かび上がらせることを目的とした。また最終的には、視覚的イメージの考察を通して、ザクセン＝ポーランド連合の二重統治期の君主の両国での政治方針について、美術政策の側面から論証することを目指した。

考察対象とする時期は、同君連合期、すなわち、ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト1世とフリードリヒ・アウグスト2世の治世とし、主に以下の3点について明らかにすることを試みた。

(1) ポーランド出身ではないザクセンの両君主がポーランド統治を円滑に進める際に、どのように視覚的イメージを利用したのか、大衆向けのメディアを中心に、その傾向を明らかにすること。

(2) 両君主が試みた、ポーランドにおける絶対君主としてのイメージ形成について、先行事例との影響関係を明らかにすること。

(3) ザクセンとポーランド、いずれもの宮廷芸術の展開に寄与したドレスデンの芸術家

による、ポーランド向けの作品における制作プロセスを明らかにすること。

3. 研究の方法

(1) ザクセンとポーランドでの、同種の大衆に流通した視覚メディアにおける君主の視覚的イメージの比較検討を行った。具体的には、君主の肖像を描いた版画や硬貨、あるいは歴史的事跡を描いた記念メダルといった媒体や、ザクセン選帝侯とポーランド国王の就任式典等の屋外での祝祭芸術などを分析対象とした。

(2) 両君主が君主としてのイメージ戦略の手本にした先行事例として、フリードリヒ・アウグスト1世が直接的な関係を結んでいたフランス国王ルイ14世と、フリードリヒ・アウグスト1世の前任者であるポーランド国王ヤン3世ソビエスキを想定し、ザクセンの両君主がポーランド国王としてのイメージ形成にあたってそれをどのように受容し改変していったのかを明らかにした。前者は、18世紀ドレスデンにおけるフランス受容の観点から分析し、後者については、二重統治期にヨーロッパ全土に広がったソビエスキ再評価の傾向と、ソビエスキが建造し、フリードリヒ・アウグスト1世が所有を継承したヴァルナフ宮殿の改修工事に注目して考察した。

(3) フランス人画家ルイ・ド・シルヴェストル、イタリア人画家ベルナルド・ベロット、さらに、ザクセンの宮廷画家として出発しながら、その後両国に向けての作品制作を並行して請け負い、最終的にワルシャワに移住して初のポーランド専属の宮廷画家に転身したヨハン・サミュエル・モックの手によるポーランド向けの作品について、置かれた場所（建造物）の持つ政治性を考慮に入れながら、

作品分析を行った。

4．研究成果

18 世紀のザクセン＝ポーランド同君連合期における宮廷芸術の二重性について、政治方針との関わりから考察し、ドイツ、ポーランド両国での調査結果を俯瞰的な立場から統合した。本研究期間中に得られた成果については、既に一部出版物として発表済みであるが、一部は今後発表する予定であり、現在準備中である。具体的な成果は以下の 3 点である。

(1)ザクセンとポーランドでは、国自体の歴史や政治体制が異なるため、君主による統治方針もそれに従って変更されることになったが、一種の政治的プロパガンダとして機能した美術作品については、これを請け負うザクセンの宮廷芸術家が、対象となる国に応じて表象の差別化を行っていたことが明らかになった。

(2)ポーランド統治においては、ザクセン出身の外国人君主が現地で受け入れられることが最優先され、その達成手段として、ポーランドの歴史的背景や表象伝統を踏まえた君主のイメージ戦略が展開されたことが明らかになった。

(3)こうしたポーランドに対するイメージ戦略が展開される際、具体的にそれが思案される場であったザクセンにおける美術の諸側面におけるフランス受容の影響が構想の基礎となったことが明らかになった。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

〔図書〕(計 3 件)

上村清雄(監修・著)、遠山公一(解題)、尾

崎彰宏(著)、神谷玖方子(著)、出佳奈子(著)、吉住磨子(著)、大野洋子(著)、金沢文緒(著)、『感覚のラビュリントゥス 視覚のイコノグラフィア トロンプ・ルイユ・横たわる美女・闇の発見』、ありな書房、2015 年、全 328 頁。(第 5 章「現実と虚構のはざま 景観画家ベルナルド・ベロットと田園風景」)

大野芳材(監修・解説)、田中久美子(著)、伊藤已令(著)、矢野陽子(著)、安井裕雄(著)、金沢文緒(著)、『フランス近世叢書 III 美術と都市 アカデミー・サロン・コレクション』、ありな書房、2014 年、全 246 頁。(第 5 章「ドレスデン王立絵画館の成立 フランスの文化的変奏としてのザクセン」)

6．研究組織

(1)研究代表者

金沢 文緒 (KANAZAWA Fumio)

岩手大学・教育学部・准教授

研究者番号：80606997